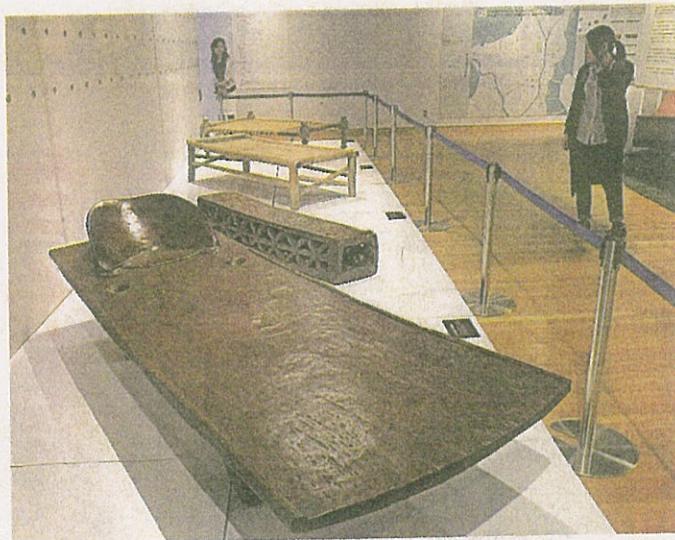


# 眠りの不思議 呼び覚ませ



## 京大総合博物館で特別展

睡眠文化の研究成果を七つのコーナーに分けて展示。その一つが「共眠から個眠へ」。「川の字になつて眠る」「雑魚寝」という言い方があるように、かつての日本では一つの部屋に複数の人が眠る「共眠」が当たり前だったが、今では

人はいつ、どこで、どうやって眠ってきたのか。人間の睡眠を文化の視点で考える特別展「ねむり展」が京都大総合博物館（左京区吉田本町）で開かれている。眠りの多様性と進化を世界の諸民族の寝具、パネル、写真など約50点で紹介している。



個室に一人で眠る「個眠」が珍しくなくなった。睡眠文化を研究する重田真義・京都大アフリカ地域研究資料センター長は、「一年に発売された日本初の目覚まし時計、1963年にワコールが発売したネグリジエなどを展示。アフリカに生息するチンパンジーの寝床づくりをヒントに開発され前から使っていたことを解説するパネル、1899年に発売された日本初の目覚まし時計、1963年にワコールが発売したネグリジエなどを展示。アフリカに生息するチンパンジーの人で眠る人の眠り方を精査すると、スマートや携帯電話を枕元に置く人が目立つ。それは何かしら外界とつな

## 文化の視点、多様性を紹介

人がいつ、どこで、どうやって眠ってきたのか。人間の睡眠を文化の視点で考える特別展「ねむり展」が京都大総合博物館（左京区吉田本町）で開かれている。眠りの多様性と進化を世界の諸民族の寝具、パネル、写真など約50点で紹介している。

このほか、日本では夢を絵で表現する時、現実と区別するため、漫画のような

「ふきだし」を江戸時代より前から使っていたことを解説するパネル、1899年に発売された日本初の目

された「人類進化ベッド」なども見ることができる。

料は一般400円、高校生300円、小中学生200円。問い合わせは同

博物館（075・753・3272）。

## 夢は神との交信手段

小松・日文研所長ら対談

「ねむり展」に合わせて、妖怪研究で知られる小松和彦・国際日本文化研究所センター所長と藤本憲一・武庫川女子大教授（メディア環境論）による対談「京都の夢文化と魔の時間」が、京都大総合博物館で開かれた。小松さんは「いにしえの日本では夢は神々と交信するためのツールだった。京都の鞍馬寺などは夢のお告げ（夢告）をもらいに行く所だった」と指摘。良い夢を売買する風習、悪い夢を見た時に災いを避けるため「夢違え」と呼ぶ、まじないをする習わしなどがあつたことを解説した。

藤本さんは「最近の大学生はあまり酒を飲まないのでも、酒は互いが打ち解けるためのツールにはならず、カラオケもあまり力がな

い。でもゼミ合宿で雑魚寝をするとき、いきなり仲良くなる」というエピソードを紹介した。

「個眠」が増える中、小松さんは「寺社にこもって一緒に眠り、見た夢を語り合えるような文化があつてもいいのではないか」と話した。（大村治郎）



世界の諸民族のベッド。手前は「コードジボワール」  
（ウズベキスタン製（手前）など世界のゆりかご）

日本では夢は神々と交信するためのツールだった。京都の鞍馬寺などは夢のお告げ（夢告）をもらいに行く所だった」と指摘。良い夢を見た時に災いを避けるため「夢違え」と呼ぶ、まじないをする習わしなどがあつたことを解説した。

藤本さんは「最近の大学生はあまり酒を飲まないのでも、酒は互いが打ち解けるためのツールにはならず、カラオケもあまり力がな

い。でもゼミ合宿で雑魚寝をするとき、いきなり仲良くなる」というエピソードを紹介した。

「個眠」が増える中、小松さんは「寺社にこもって一緒に眠り、見た夢を語り合えるような文化があつてもいいのではないか」と話した。（大村治郎）